

『対話：ルソー, ジャン=ジャックを裁く』について：
虚構, 論理,<エクリチュール>

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): ルソー, 妄想, パロール, エクリチュール, 自然状態, 社会状態 キーワード (En): 作成者: 小西, 嘉幸 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2004965

Title	『対話：ルソー, ジャン=ジャックを裁く』について：虚構, 論理,<エクリチュール>
Author	小西, 嘉幸
Citation	人文研究. 28 巻 8 号, p.523-550.
Issue Date	1976
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

『対話 ルソー、ジャン＝ ジャックを裁く』について

—— 虚構，論理，〈エクリチュール〉 ——

小 西 嘉 幸

1

「この人間は私を不安な思いで満たす。彼がいると、なんだか地獄に落ちた魂がかたわらに立っているかのように思われるのだ。彼には二度と会いたくない。彼は私に地獄や悪魔をも信じさせかねない。」

1757年12月、ディドロが最後にルソーと会った晩に書いたこの手紙を引いて、カッシーラーは、啓蒙主義の指導者たちがルソーの中に見出した「デモニーッシュな力」について語り、こう結んでいる。「ルソーが自分に対してたくらまれていると妄想した陰謀とは、実はこの時代の最深部の精神的自己保存衝動から発し、それに根拠をもった反動（反作用）なのであった。」⁽¹⁾

『対話 ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』⁽²⁾は、このような〈陰謀〉の妄想がもっとも鮮明に表出された作品であり、その奇怪さのため、独立した一箇の作品として扱われることはきわめてまれであった⁽³⁾。冒頭のディドロの手紙の時期にルソーは啓蒙主義者たちと袂を別って、以後隠遁生活の中で次々と彼の代表的著作を発表するが、1762年『エミール』がパリ高等法院によって断罪されたため亡命を余儀なくされ、スイス－英国－フランスの各地を転々と移り住んだのち、パリに落ち着き、1772年から76年の4年間を費して、この「自伝的」作品を書く。（『告白』以後の全作品は没後の刊行。）

『対話』の中でルソーは自分を迫害する〈陰謀〉の発端を、15年前（つまり『エミール』の断罪とルソーに対する逮捕令の発行）に置いたり⁽⁶⁶²⁾、20年前（1957年末のディドロ、グリム、デピネ夫人ら友人たちとの訣別）に置いたりして^(714, note: 734)、動揺があるが、妄想の中で彼の「怯えきった想像力」⁽⁷⁸⁰⁾がとぎすまされるときには、事態をより遠い起源へ、より包括的な説明を与えてくれるように見える仮説の方へと傾いたと考えられる。とはいえ、ここで注意しておかねばならないのは、『対話』がこのよう

な迫害妄想のもっとも悪化した時に書かれた作品なのではないという点である。近年では、Jacques Borel 博士が、ルソーの鬱病の迫害妄想形態は1957年から1965年にかけてゆるやかに間隔をおいてあらわれ、1766年から1770年にかけて頂点に達すると述べて⁽⁴⁾、この期間のルソーの書簡をはじめとする文章を刻明に辿っている。それによると、『対話』に表出されている妄想観念の内容はほとんどすべてこれらの書簡などですでになじみのものにすぎないということがわかる。そしてそれらが『対話』において作品化される時期は Borel 博士によるとむしろ病気の鎮静期に入るのである。

けれども、解釈妄想病⁽⁵⁾においては鎮静期といっても妄想の消滅を意味しないから、『対話』の書かれた時期の問題は、妄想と作品の関係を考える場合、本質的ではない。ルソーの妄想病の頂期に書かれた数多くの書簡と、その後になった『対話』が異なる点は、まさに書簡と一箇の文学作品という相違に求めねばならない。書簡は個別的な他者へ語りかけることば (parole) であり⁽⁶⁾、精神医学で臨床状況 (situation clinique) と呼ばれるもの (患者が医者と一対一の関係に入り自己を語る) は、この parole の介在による人間関係という一般的状況を模したものにほかならない。それに対して〈作品〉はまず〈書くこと〉 (écriture) による想像力の表出と仮構であり、それは本質的に特定の語りかけの相手を想定しない。このことはもちろん読者の問題を考えないことではなく、〈読者〉という概念の位格 (statut) が、人間関係における他者とは異なるということである。読者が作品を間において作者と対話するという図式は比喻としても単純化しすぎている。〈作者〉が作品を生み出した個々の日常的な人間そのものではなく、作品が生み出される〈文学空間〉の内在的な行為者として存在するように、〈読者〉という概念もまた、日常的な生活者の行為の一つには違いない〈読む〉という行為の開始とともに、この同じ空間に内在化されたところに成立する概念である。したがって、一義的には作者と読者は生活者のレベルでそれぞれの個別的なパーソナリティをもって交際するわけではない。あたかも商取引において法的契約によって当事者の日常的人格が疎外されているように、われわれは読むという行為における (同時に書くという行為における) 疎外についても語りうるだろう。(ルソーにおけるこの問題の意味は後に触れることになる)。われわれはルソーの敏感関係妄想につき合わされたディドロやヒュームをはじめとする多くの同時代者の当惑・反撓・攻撃・中傷⁽⁷⁾を手にしているけれども、〈読者〉としては彼らのようにルソーの隣人であることも、さらに

結局同じことだが公正な第三者として振舞うことも⁽⁸⁾、一義的には可能でない。そしてまさしく『対話』においてはたらいっているものは、作中人物 J. J. が日常的生活者として警戒と猜疑の中で不断に他者を遠ざけるとともに、作品そのものが執拗に〈読者〉を要請するという両義性なのである。

この作品全体に付された短い序文：

この著作をたまたま手にする人にあえて何かお願いするなら、これをすみずみまで読むまでは処分したり、誰かに話すことさえしないでいただきたいのである。しかしそのような好意が私に許されていないことははじめから確かなので、私は沈黙を守り、すべてを神の摂理にゆだねる。(659)

この文章の運びに注意しよう。控え目な、ほとんどあきらめに近い条件法を通じて、ルソーのただ一つの要求だけがきわ立つ。読み尽すこと (le lire tout entier)。そして、それについて語ることは、この条件のもとにのみ許されているかのように見える。だがルソーの関心が作品について語られることにはないのは明らかである。読まれることへの絶望が支配するとともに、語ることは実質的に禁止されるのだ。かすかな可能性への期待ではじまった文は、最後に全き絶望の淵に沈みこむ。此岸をこえた神の摂理の前ではもはや著作が読まれることすら必要ではないだろう。したがって作品を手にしたわれわれの出発点もまた、作品を(作品として)読むという、あたり前の地点にしかありえない。けれどもこのあたり前の行為こそがこの作品の場合には本質的である。ルソー自身が異例にもわざわざ前書きでことわっているように、これは「ところよくすばやい読書を望む人」は近寄らない方がよい、困難と疲労をとまなう作品なのである。あらゆる文学作品をひとしなみに客観的な対象として論ずる〈研究者〉の眼とは別に、この作品が一読者に強いる疲労感にはたえず自覚的であるべきだろう。それはむしろこの作品の妄想的性格からではなく、妄想のなかでたたかう観念の膂力からくるものなのである。『告白』が、いわば細いせせらぎに発して、それから先の水路が見出せない暗いよどみに達したところで終わり、『夢想』が小さなモノローグを数珠玉のように連環した作品だとすれば、その間に位置する『対話』は多様な意味と像を乱反射する一箇の異様な結晶体にたとえることができる。われわれがさしあたって見ようとするものは、それらの箇々の意味や像ではなく、それを可能にしているこの構造体のしくみと性質である。

『告白』の最後をしめる第12巻（1770年執筆）の冒頭で、ルソーは自分を閉じこめ、「どんなにもがこうともそのおそろべき暗黒を見透すことのできない」「闇の仕業」を語る。

私を呑みこんだわざわいの深淵のなかにあって、私は加えられる打撃をわが身に感じ、その直接の武器は見てとれたけれども、それをあやつっている人間も見えなければ、どんな手段を用いているのかもわからないのだ。恥辱と不幸とが、あたかもひとりで、いつのまにか私のうえにおそいかかってくる。……私の破滅をもたらした人々は公衆を彼らの陰謀の共犯者にしてしまっていて、しかも公衆はそうになっているとはつゆ知らず、その結果を見もしない。これはあの連中が発見した途方もない術策であった。だから私は……事実はそのべはするもののその原因を指し示すことはできない。……もし私の読者のうちにこうした謎を掘りさげ、真実を発見しようと思うほど高潔な人がいるならばさきの三巻を注意して読みかえし、……陰謀から陰謀へ……さかのぼって行って、全陰謀の首謀者たちまでたどっていただきたい。こうした探索の到達する終点がないか、私は確実に知っているが、そこへゆきつくまでの暗い曲りくねった地下道で、私は迷ってしまうのだ。（588）

ここにはすでにルソーに『対話』を書かせた状況認識、心理状態ばかりか、作品そのもののモチーフも主題も目的も述べつくされている。ただ方法のみが逆転したのだ。「事実の隠された原因」を「帰納法によって発見する」（『告白』587）という道筋が途切れた先に「闇の三重の壁」がおおいにかぶさる。『告白』完成後ルソーは親しい人々の前で朗読会をもつ。その最後に「誇らかに、恐れず」宣言する。「誰であろうと、たとえ私の著作を読まずとも、自分自身の眼で、私の本性、性格、品行、性向、楽しみ、習慣を検べてみて、それでも私を不誠実な人間と考える人があれば、その人の方こそ息の根をとめるべき人間だ。」——その結果をルソーは報告している。「私はこうして朗読をおえた。そしてみんなはおし黙った。」（P, I, 656）息の根をとめられたのは『告白』の声であるとともに⁹⁾、その帰納法なのであった。『対話』はそこで方法的な転倒を出発点とする。「個々の動機をすべて集成しうるような一般的仮説に立って推論することであり、あらゆる可能な想定の中で私にとっては最悪、私の敵にとっては最良の仮定を選ぶこと」（663）。

この演繹法が、かつて『人間不平等起源論』でとられた方法であることはよく指摘される。ただ、『対話』においては、この方法が二重に分岐することが重要な点である。それは陰謀の存在についての一般的仮説であるとともに、同時に J. J. を、あたかも『不平等』に描かれた仮説としての自然状態に住むかのような＜自然人＞になぞらえる。ルソーは『対話』の前書きである「この著作の主題と形式」の中で、陰謀を明らかにするという作品の目的を語ったあと、それに必然的に随伴するものとして、「たえず自己を語らねばならない」という。

ルソーが自分を閉ざす闇の中で「一条の光」をいかに待ち望んだかは『告白』にも『対話』にも繰返し語られている。それは彼の極端なまでの闇への恐怖に裏うちされている。「どんな不幸でも正体がなにかわかっていさえすれば、私を動揺させ落胆させることは決してない。しかし私の生まれつきの性向は暗闇を恐れることだ。その暗黒の気配を私は恐れにくみ、謎がいつも私を不安にする……。どんな醜悪な怪物を見ても私はほとんど恐くない……。」（『告白』566）『対話』の一般的仮説は、四方の闇に向けられた推論が闇にのまれて消えてしまうとき、「一条の光」——というよりむしろある普遍的な光となる。この光によって、闇はその力を失い、無化するだろう。「彼にとっては自分がすべてなのですが、彼ら（敵たち）にとっては彼がすべてなのです。なぜなら、彼らは彼にとっても彼ら自身にとっても無にすぎない……」（860）。自分をとりかこむ敵たちの不可視の闇の中で、＜すべて＞と＜無＞の逆転がおこる。一般的仮説の光の中で、敵たちは自分を怪物と見ているのだ。J. J. が不可視の関係におびえていたのに対し、敵は J. J. = 怪物という可視の実体をおそれているにすぎない。（啓蒙主義知識人たちがルソーを怪物と呼んだのは事実であり、この両者の相互認識の質の差は、18世紀という時代の中でのルソーの特異性をよく示すと言えよう。）この怪物のイメージはあたうるかぎりの特殊性を付与される。「この世でだれ一人頼りにできず、悪党仲間とさえ協定を結べない人類の恐怖、怪物」、「あまり特別すぎて、自然が決して生み出したことはなく、これ以上二度と同じようなのを生み出さないでほしい」（705—6）。こうしてほとんどそれ自身が仮説の領域にまで変容された怪物のイメージは、その特殊性という一点において＜真の J. J. 像＞に逆転され接続される（800）契機をすでにはらんでいる。その逆転が「自己を語ること」によってもたらされるのである。一般的仮説が闇にむけてさし出す光を、今度は自分のほうにむけなおすとき、闇の中の

孤立した自己を非現実的なまでに鮮明に浮かび上がらせることになる。

けれども、自分が自分にあてる光が虚構をふくまざるをえないことは明らかである。「私の目的を果すためには必然的に、私が他者であればどんな眼で私のような人間を見るかということを語らねばならなかった」(665)。むしろこのような操作は日常われわれが意識的・無意識的にしばしば行っていることだが、『対話』という作品においては、自己がいわば二重の虚構化を蒙っている点が重要なのだ。光を当てる主体は「私が他者であれば」という仮定のもとにあらわれ、対象は「私がそうであるような人間」(un homme tel que je suis)である。ルソーはさらに一般化して、「他人において私の気質と似た気質を注意深く研究した場合に導き出せるであろうようなものをただ説明するだけ」(665)とまで言う。ここでは自己観察が、主体と対象の両面で二重の他者化を媒介として成立する。いずれか一方で自己が、他方が他者に見たてられるという関係ではないので、ここで問題となっているのは本質的に＜対他性＞なのではない。存在としての自己を、見る他者と見られる他者の両極構造としてとらえ、それを作品化した『対話』において生じているのは、一つは＜一般化＞の問題であり、もう一つは＜虚構化＞の問題である¹⁰。そして前者は『対話』において展開される＜J. J.＞とルソーの思想との同一化（自然人としての J. J.）に行きつき、後者はこの作品そのものの本質を規定する。

3

『対話』は＜一フランス人＞と＜ルソー＞の二人が、J. J. という人物に対する組織的陰謀の手口と真の J. J. 像について語り合うという形式をとっている。先に引いた『告白』のテキストの中で、ルソーは謎の解明と真実の発見を外部の＜読者＞に委ね、＜私＞は道に迷うと言っていた。今度は一般的仮説の演繹法によってこの謎の解明が作品の内部で行われるのである。＜フランス人＞とはまさにそのような外側表面にいる読者が、ちょうど方法の裏返しによって内側表面に呼び込まれた姿をあらわしていると言えよう。そして道に迷っている＜私＞の方は、その分だけ作品の一番奥にいる記述対象としての J. J. から剝離外化され、＜ルソー＞という役柄として、作品の同じ内側表面にまで浮上してくる。そこが『対話』の舞台面を構成する。この二人の登場人物が、それぞれ虚構を担うものとして設定されていることに注意せねばならない。まず「第一の対話」において＜フランス人＞

が、J. J. に対する善意の同盟の存在とその手段について語ることによって、作者の一般的仮説（「私の敵にとって最良の仮定」）の虚構を担う。同盟の主謀者たち（nos Messieurs）は、あまねく公衆に J. J. の罪を知らせ正体を暴露するが、この怪物に対する「寛大と同情に基く主義」（724）によって、彼ひとりに対してだけは絶対的な沈黙の掟を公衆に守らせる。彼を被告として直接に訊問し、その反論を聞き、決定的な裁きをつけて罰を課するという形式的な手続きは「ここでただ一つ問題になっている恩恵を施すということのためには必要ではない」、「彼の自由を侵さずに彼を監禁し、彼が全世界の災とならないよう、その恐怖の的にすること」（708）が重要なのだ。「この計画の実行をよりすばらしくするものは、それをおおわねばならなかった神秘さなのです。すべての人にこの人物を描いてやりながら決してこの肖像画が彼の眼に届かないようにせねばなりませんでした。全世界に彼の罪を、しかもそれを彼ひとりだけ知らない秘密であるようにして、知らせねばならなかったのです。」（709）——まさに J・ゲーノが指摘したとおり、カフカの『審判』や『ある流刑地の話』に似た状況である。それは晩年のルソーの抱いていた妄想の内容そのものでもあるのだが、登場人物の口を通して語られることによって、この状況および細部のグロテスクさ自体がカフカの寓話にも似たイロニーを感じさせるようになっていく。自己の妄想を素材として作品に定着する際に、作者がこの仮構作業によって生ずる〈効果〉と素材との間の微妙な反りかえりを意識していなかったはずはない。それはまた、もう一人の人物〈ルソー〉の口をかりて行われる次のような妄想の自己批評にも確認されるだろう。「J.J. をとりまこうとしている深い闇が彼にもたらす不安な観念のすべてが現実だというつもりはないのです。あらゆるものが彼にとっては秘密にされていてあまりに黒々とした様子なので、それらの秘密が彼の怯えきった想像力を同じ色合いで染め上げていたとて驚くにはあたらないでしょう」（780）。こうした箇所を、四年間にわたって「非常に短時間だけを費して思いついた考えをそのとき書き留める」（664）という執筆作業のなかでの妄想の鎮まりの時期にだけ対応づけるべき根拠はない。むしろ作品という仮構そのものが可能にした対象化というべきだろう。

さて、次にその〈ルソー〉が担っている虚構形成は、言うまでもなく「第一の対話」の冒頭に描き出される「私たちの世界に似ているにもかかわらず、まったく異った理想の世界」およびその住人たち（668—72）と、「第二の対話」で提示される「虚構の人物」（être fictif）（820—3）である。それ

らが内容的に同じものであることは明きらかだが、この作品にとってより重要なのは、むしろ二つの虚構世界を同定する論理の運びなのだ。〈ルソー〉がはじめの「理想の世界」を語り終えると、〈フランス人〉は「ルソーさん、まるであなたがその世界の住人みたいですね」と鎌をかける。〈ルソー〉はそれには直接答えず (ambiguïté を残したまま) 「少なくとも『エミール』と『エロイーズ』の著者は明きらかにその一人だと思う」と話をもっていく。「第二の対話」では、彼は直接会見してきた J.J. の人柄について「幼い頃からあらゆることがあいまって彼の魂を肉体の住む場所から引き離し、まえにお話ししたあの天上世界 (régions éthérées) に引き上げたのです」(819) と言って、J.J. をこの monde idéal の住人にする。次に『不平等論』と同じ論法によって「しばらくあらゆる事実をしりぞけ」、「私のお話しした (J.J. のような) 気質だけしか知られていないと仮定して、われわれが何の観念ももっていない虚構の人物にその気質から自然に生まれる結果を見てみましょう」(820) と提案する。そこで描かれる人物は、あの理想の世界の住人について記されたと同じ性格——「少しでも障害があると立ち止り、尻込みし、無為の中へ引き返す」、「魂の弱さ」(822 & 669) ——をもって、さらに、「現実の中に閉じこめようとするきつい枷から解放され、やすやすと膨れ広がる……虚構の魅力」(822) につかれた人物である。この原理的な説明を一般性として行ったあと、「私のお話ししたような気質をもった人間では以上のものでしょうし、私が研究してきたばかりの人もそうだったのです」と J.J. を同定するのである (826)。

こうして二人の登場人物のそれぞれに担われる二つの虚構性は、この作品を一つの球体と考えてみると、前者がその球面 (J.J. をとり囲む陰謀という状況) を仮構し、後者がその中心部 (真の J.J. 像) を穿ち埋めているとすることができる。しかし、さらに注意してみれば、作品の球体はここでは決して安定したモデルをなしていないことに気づくのである。

中心を占める J.J. の描写は、「第二の対話」においてその日常に接してきた〈ルソー〉によってたえず日常的な生活や行動の外見描写 (植物採集、写譜、輝きのない会話、怠惰など) から、内面の気質や感受性の説明に移る。気質については先に être fictif による一般化と J.J. の同化を見たが、感受性についても、まずその理論的レベルでの定義が示され (これは『不平等論』ではじめて提示された、自己愛 amour de soi と自尊心 amour pro-

pre の区別というルソーの思想の中心的な問題を、新しい角度から深化した
ものとして重要なテクストである⁽¹¹⁾、そのあとで J.J. への「応用に移る」
(807) という運びをとるのである。そして最後に、このような J.J. の生が
蒙った不幸を償うものとして、想像力に決定的な重要性が与えられる。それ
はまず「この世の富がすべて残酷な手によって奪われている」ことに対する
代償とされるが、つぎの瞬間にはむしろ「見せかけの富は魂に真の幸福感を
もたらさない」がゆえに、この「運命も人間も奪いとることのできない」想
像力の富、すなわち「空想 (vision)」の方が「もっと現実性がある」こと
になる (814)。このような J.J. 像がああ『新エロイズ』の虚構の世界に
近づけられていることは明きらかであろう。ルソーは『告白』においては
「楽しいことだけを思い出す私の記憶は、残酷な未来しか見ようとしないう私
のおびえた想像力とうまくつり合ってくれる」(278) と書いており、それが
過去を描くことによって「自己の魂の歴史」を語るという『告白』の方法を
保証していた。だが『対話』では、それに代わって彼の「好意的な想像力」
(bienfaisante imagination) が主役を占める。「渴望する対象に心をうちこみ
欲望によってそれに向かおうとするあまり、彼の好意的な想像力は彼を立ち
止まらせ怯えさせている障害をとびこえて目的に達します」(857)。そして、
かつて記憶に否定的に対置されていた「おびえた想像力」さえ、ここではむ
しろ「好意的な想像力」に協力し、条件をととのえる積極的な役割をはたす
ものになっている。「未来のことすべてに最悪の事態を予想して彼は気を
安め落ち着くのです。……恐れている不幸を前もって見込んでおくことによ
って、彼はその不幸からもっとも大きな苦しみを取り去るのです」(858)。
いわば『告白』の健全なバランス感覚が、マゾヒズムに倒錯しているわけだ
が、そのようにしてまですべては想像力に一元化されるのである。『告白』
で主たる位置を与えられていた「楽しいことだけを思い出す私の記憶」は、
『対話』において、同じことが語られる場合にも、むしろ想像力のはたらき
に支配され左右されるものとなる。「彼の心を楽しませてくれる思い出にひ
たるのに役立たない悲しく不快な思い出は退け、思い出しても快いものが何
もない時代だった時には、彼はその時の記憶をみんななくしてしまうので
す」(858)。想像力によって J.J. は幸福な過去を「再び生き始め」たり、
「自分の望む未来へ飛び立っ」たりするが、「さらに多いのは、感覚と虚構を
協力させて……天上界で自分を取りまく魅力的なほとんど天使のようなもの
のさなかを飛びまわっている」(858) ことなのである。

このようにして、「虚構の存在」，「理想の世界の住人」に同一化される J.J. 自身が，たえずみずから虚構を産出する存在，「想像力の翼にのり，われわれを取り巻く気圏のもやの上へと昇る人，……天上の国へと飛翔する人」(815) なのである。『対話』の球体はしたがって，J.J. がこのような虚構を産出する虚構存在であることによって，その中心部にたえず不在の彼方へ向かう運動を抱えこんでいるといえよう。

さらに＜ルソー＞はこの J.J. が「対話の形式で私たちの会話の結果生じるような判断によく似た，迫害者たちと自分についての一種の判断を書いた」ことを＜フランス人＞に報告している(836)。これは『対話』の内部での＜ルソー＞と＜J.J.＞の二重化とは異なる，著者の二重像ともいうべきもので，作品の内部にいてこちらに背中を見せて＜対話＞を描く J.J. のうしろ姿は，作品の読者には見えない著者自身のうしろ姿を＜像＞として示す虚構であり，先にのべた不在化する中心の運動を一瞬作品の外部へと反転させる目まいの効果を生み出す。虚構というものがこうした戯れを含んでいることは当然だとはいえ，この作品が「これまで書いた著作の中でもっとも強い反撥をもって企てられ，もっとも強い嫌悪をもって書かれた」(836; cf 664) だけにやはり忘れてはならない点だろう。

次に中心から今度は球面の方に目を転じてみよう。それが＜フランス人＞によって担われる「一般的仮説」という虚構で構成される面だということはすでにのべたが，実はここにもある種の不在——いわば仮説の光が及ばない闇があって，この作品をおおう球面が完全な閉曲面であることを妨げているのだ。われわれが言っているのは，「第一の対話」の幕が開く以前の隠された対話のことである。『対話』のテキストは，この隠された，重要な話題が一区切りしたところで，突如＜ルソー＞の荒々しいセリフで始まる。「何とまあ信じられないことをうかがったものです！ あきれた話だ，まったくもってあきれたものです。いやはや！ なんと憎むべき男だ……」舞台が始まる前の闇の中に押しやられたのは，J.J. という人間がどのように怪物的な悪人であるかという，第一の定立なのである。発端のこの不在は，そもそも定立と反定立によって進行する＜対話＞という形式の土台を掘り崩しかねない根本的な欠落だと言わねばならないが，それこそまさしく『告白』の帰納法が中断して終った先に拡がっていて，『対話』が演繹法に反転したとき，＜一般的仮説＞によって必然的に排除された不可知の領域である。けれども

同時にそれは、テキストが始まる以前にすでにそこから＜対話＞が始まっている最初の定立、不在の起源として、作品空間に内在化されているのだ。そしてこの最初の定立の曖昧さが、「敵にとっては最良の仮定」であるはずの一般的仮説を担う＜フランス人＞を次のような背理に追いこんでいくことになる。＜ルソー＞の指摘：「あなたは話の初めには、彼の犯罪を彼の悪辣さの証拠としてあげていたのに、今や彼の悪辣さを犯罪の証拠としてあげるのですね。彼の性格があばかれたのは事実によってだというのに、事実の正式の論議を避けるために彼の性格を引き合いに出すのですね」(746)。

じっさい、＜フランス人＞が「この卑劣な男 (J.J.) の大罪についての説得的な数々の証拠」(692) と言うにもかかわらず、J.J. の具体的な罪条告発とみなされるものはきわめて少なく、断片的に散在しているだけであるのは注目に値する。しかもそれらが「第一の対話」に先立つ隠された対話からの再論なのか、それとも新しい情報なのかはあいまいである。つまりそれらは痕跡でありながら、むしろ起源への逆行的な関係づけを断ち切られているかのように存在する。

テキストから順に拾い出してみると――

- 1 『村の占者』が偽作である (674) ;
- 2 写譜をしているように見せかけながら匿名の駄文（「無神論の教説、現代哲学礼讃、追悼文、翻訳、諷刺……」）を書きちらしている (690) ;
- 3 作品の中で毒をふりまいている (693) ;
- 4 捨て子の罪 (701) ;
- 5 上京して以来の友人や庇護者に対する忘恩 (720)

のほぼ五点につきるといってよい。はじめの二つは事実と反する（しかし実際ルソーに関してなされた）中傷である。問題はあとの三点（3は著作に関するもの、4と5は人格に関するもの）であり、この作品における狭義の自己弁護のモメントはすべてこれらをめぐって展開している。ここでは特にルソーの罪責心理の最深部に位置する「捨て子」の問題が、この作品にどのようなあらわれ方をしているかを見ておこう。

「捨て子」事件は、テキストの中で直接にその事実が語られるのではなく、ただ「彼は、自分が犯し、その秘密を必要もなく役にも立たないのに彼らに打ち明けた一つの重大なあやまちを、公然と宣言することによって、みずから彼らに手がかりを与えた」(701) と暗示的に語られるだけだが、この箇所

のテキストには、voile, secret, démasquer, éclairer, pénétrer, découvertes といった単語が集中していることからわかるように、捨て子事件は「この美德の大説教者が、人に知られぬ罪を犯した怪物にすぎず、この四十年間悪党の魂を正直な男の外観に隠していたこと」(701-2) という、J.J. の道徳的な正体の核心に置かれていて、ヴォルテールの匿名の中傷文『市民の感情』ではじめて暴露された「この信用のおける、そして十分に悪化された事実のおかげで、他のこと [J.J. 断罪の他の口実] はみんな容易になった」(703) のである。捨て子の罪責感ハルソーの心理の最暗部を動かして、防衛機制によって形成された妄想の中の迫害の陰謀においても、そのもっとも不可視な部分に投射されていると考えられる。捨て子事件が事実のレベルで言及されているのは、今引いた箇所だが、実はむしろ作品の表層には見えない、より根源的な部分を支配しているのである。作品のはじまる以前にもしやられた、＜フランス人＞による J.J. の罪状告発をうけ、「第一の対話」の冒頭で＜ルソー＞は自分が読んだ「魂を高揚させ心に火をつける」J.J. の著作のもつ力を弁護したのち、次のように言う。

今あなたが描いてくださったような著者の手になる著作の中に見せびらかしとたわごとしかないとすれば、もっと私の恐怖心は小さいでしょう。その程度の悪人なら、無味乾燥なお説教には心を動かされずとも、自然が蓄えてくれているのに情念が押し殺しているあの公正さと人道の感情を彼の心のうちに探し出し、よみがえらせてやれば自分自身に立ち帰り真人間になるでしょう。しかし美しさにみちた徳を冷ややかにながめられるような人、徳に心を動かされもせず、徳への愛に熱中することもないのに、この上なく感動的な魅力で徳を描けるような人、そんな人がありうるなら、それこそどうしようもない悪人であり、生ける屍なのです。(668)

このテキストを、『告白』第八巻で捨て子について告白したあとの次のような自己弁明のテキストと対比してみよう。

たとえ結果においてまちがっていたにせよ、私がそれにしがったときの落ち着きほど驚くべきものはない。もし私がやさしい自然の声に耳をかさず、正義と人道との真の感情が心のうちにきざすことのけっしてないような、たちの悪い人間であつたら、こうした冷酷さまでく当然のことだろう。しかし、この

燃える心情、はげしい感受性、……偉大なるもの、真なるもの、美しきもの、正しきものへの燃えるような愛……そうしたすべてのものが、義務の中でももっとも快い親の義務まで容赦なくふみにじる墮落した心性と同じ魂の中で結びつくことが可能だろうか。(356—357)

この二つのテキストの類似はきわめて示唆的ではないか。後者はルソーの否認のはげしさを通して、捨て子の罪責感の深さをもの語っている。そして、表面的には J.J. の著作について語っている前者のテキストは、後者との字句の上での類似と、同じ否定のはげしさとにおいて、やはり捨て子の罪責感を深部にひびかせていると解せないだろうか。

『告白』のこの箇所ですぐ続いて、罪の自己否認のはげしさにいっきょに対応する反動の大きさを示すかのようにルソーは「自分をプラトン共和国の一員と見なしていた」ことを語るが、『対話』の冒頭においてもまさしく、今引いた箇所は、作品の開始以前に描かれた憎むべき怪物のイメージに対立させて＜ルソー＞が「理想の国」を紡ぎ出す結節点におかれている。言いかえればここでは、隠された捨て子の罪責感の深さこそが、自分が怪物であるというイメージを引き寄せると同時に、それを否定的媒介として、自己を「理想の国」へと虚構化する転軸器になっているのである。

4

テキストのはじまる以前の＜対話＞欠落(罪状告発の不明確)が論理的な必然として作品にもたらす帰結は、迫害者と公衆の裁きの庭に出廷して正当に告発を論駁することが J.J. に先験的に許されていないという、あのカフカの状況設定である。ルソーが思想家としての出発いたえず多くの現実的・仮想的な論敵との真正面からの論争を強いられ、それを通して自己の思想の正当性と真正性を擁護し確認してきたことを思い起こそう。だが『対話』とは、そのような条件すらあらかじめ奪われているがゆえに、まさに虚構によって虚構を撃つしかないという一つの極限的なすがたを示す作品なのである。

しかしまた『対話』はその形式的な必然からしてもきわめて論理的な作品である。じっさいそこに見られるのは強固な作品の論理的構成(展開)であるとともに、個々の対話を呪縛しているがごとき、論理への偏執なのだ。この点において『対話』はルソーの思想的著作にみられる大きな特徴である論理性(とくに『社会契約論』にみられるような凝縮された緊密な論理の展

開)を受けついでおり、いわゆる自伝的著作系列の中であって、『告白』や『夢想』とは大きく異っている。(『告白』——『対話』——『夢想』の質的な転換は重要な問題であるが、ここではふれない。)『対話』のテーマである〈裁き〉に、単なる文学的象徴や、ルソーの無意識の願望の投影を見るだけでは不十分であろう。作者は〈ルソー〉の口をかりていみじくも言うように、方法としての「刑事訴訟の手続き」(736)に固執し、長々とした刑事裁判論を展開するのである(731—40)。

『対話』が問題にしている〈裁判〉(jugement)とは、論理的なレベルでは、J.J. という人間が悪人である／善人である；彼の作品が有害(悪)である／有益(善)である、という形式的に独立した四つの命題に関する〈判断〉(jugement)である。そしてこの判断がその裏の命題をも同時に成り立たせようとしていることも見落してはならない。J.J. について判断する(裁く)ことは、彼とその作品を裁かずして彼を迫害する暗黒の陰謀の同盟に加わっている「貴族、作家、医者、あらゆる権力者、あらゆる上流婦人、あらゆる信用ある団体、あらゆる行政官、世論を支配するあらゆる人々」(781)と彼等のしたがつている「不正の原理」(900)を、いいかえれば一つの時代の意志を裁くことと相補的なのである。

『対話』は、〈フランス人〉の最初の判断に順次〈ルソー〉が論理的に異議をはさむように進行する。この〈ルソー〉のもっとも特徴的な方法は分離と同定である。以下にこの作品の論理的展開に焦点をあてて少しくわしくたどってみよう。(〈ルソー〉をR、〈フランス人〉をFと略記する。)

幕あき前の対話 (空白) RはJ. J. に会ったことはないが、自分が読んだJ. J. の作品に魅せられていることを語る。

FはJ. J. に会ったことはないが、彼が悪人であることを語る。

第一の対話 FはJ. J. が悪人であるがゆえにRの魂を奪ったJ. J. の作品も有害だと言う。

Rは作品の魅力を強調し、作者を「理想の国」の住人に描く。〔虚構化〕
そしてRは悪人J. J. と作者J. J. の矛盾を解決するためにこの両者を別人と考えることを提案する(674)。〔分離1〕

それと同時にRはFの描く怪物J. J. を認めたとしても、彼の生涯が「まったく違う二人の人物に属するように見える二つの時期に分けられ」、その時期は「彼が作品を発表した時期に当たるが、それは一方の人物の死であ

り、他方の人物の誕生である」(676)と言う。〔分離2〕。すなわち悪人 J. J. ≠ 作者 J. J. かつ前半生の善人 J. J. ≠ 後半生の悪人 J. J. となり、この二つの分離は前半生の善人 J. J. を後半生の作者 J. J. につなぐ見えざる環を暗示する。

Fは J. J. 悪人説の根拠として J. J. の『村の占者』は偽作であると主張する(これは現実に流されていたうわさである)。

Rはそれを逆手にとり、そうであれば同じ精神と心情によって書かれている J. J. の作品のすべてが悪人 J. J. のものではないとし、自説を補強する。〔分離1'—全体化〕

Fは J. J. 悪人説の別の根拠として、彼が匿名で有害なパンフレットを書き散らしていることをあげる(690)。

Rはこれらをさらに分離1の証拠とする。「彼が本当に自分で認めない著作の作者なら、それは彼が自分のものだと言っている著作の作者ではないという新しい強力な証拠です」(692)。〔分離1''—対偶〕

つぎにFは方向をかえ、指導者たちの主張に従って作品そのものの毒を指摘することから出発して、作者と J. J. の同一性に固執する(693—5)。

Rの反論：「毒を感じるのにそれを探し出す必要があるのなら、その毒は、探している—というよりそこに毒を入れようとしている人にだけ存在するのです」(696)。ここではじめてRは逆告発の視点を導入する。

Fはさらに別の論拠として、世論の一致をもち出す(698)。

Rはこの多数決原理は、「他人の声を繰り返すだけの餌をとり除き」、自身自身の判断にもとづく意見だけを前提にすべきだと主張する。〔分離3〕

ここでRはFが作品を自分で読んで判断することをすすめる。Fはその代償としてRが悪人 J. J. に会って調べてくることを提案するが、ただし J. J. に会っても決して彼の正体が公衆に暴露されていることを知らせず、完全な沈黙を守るという「神聖な約束」を強調する(699)。Fはその説明として、悪人 J. J. に対する同情と寛大さから、彼を裁かずに隔離するという同盟の組織的な方法を詳述する(ルソーの迫害妄想が集中して表現される箇所)。Fによれば、この同盟は J. J. に対して恩恵を施すという善意に発しているのである。

Rはこれに対し、受けとる人の同意のない恩恵は不当だと反論する(745—6)。捨て子の罪責感をルソーの意識の一つの核だとすれば、この同意なき恩恵への反撓はもう一つの核をなしている。ジュネーヴ下層階級出身の

異邦人ルソーがフランスで友人や恩人と次々に手を切った動機は、一方的に恩恵を施されるほかないという人間関係からの独立の希求であり、それに対して加えられた忘恩の非難が自分をとりまく全世界に対するルソーの反抗心を形成する。「敵にとっては最良の仮説」たる恩恵の同盟というフィクションは、この反抗心の対象として投影された極限形態にはかならない。

最後にRはFのさし出した証拠の説得力を認めるという譲歩戦術をとりながら、そこに三つの欠点を指摘する。第一にその証拠が強力すぎ、出所が多すぎるため、この司法的手続によらない証拠蒐集そのものに隠された情熱がうかがわれ、この情念による結果が疑わしくなる。第二にその証拠が証明しすぎるため、存在しえないような不自然さを証明してしまっている。第三に証拠提出が秘密裡にととのえられているため、「法学の原理」によって、「被告に対する証明というより告発者自身に対する反証となる」(757—8)。

第二の対話 Rは自分が会って観察してきた J. J. 像をFに伝える。ここでもRの論理はまず、流布している肖像画と実際の J. J. との分離からはじまる。だがそれは単なる外見の類似の問題を越えてあらわれる。肖像画は「肉体よりも精神に似せて、モデルを描くこと」(778)が重要なのだ。Rが見た J. J. は魂がすぐ表情にあらわれる卒直な人間だ。それゆえRは J. J. の日常行動や性格の外見を入口としてたえず彼の魂を描くことに移る。しかもそれは魂を直接描くだけにとどまらず、しだいに、まず一つ idéal (観念的・理想的・理念的) な存在を提示し、それに J. J. を同定するという手続きが繰返されることになる。つぎにそれを列挙してみよう。

1. 感受性一般の理論 (805) とその適用例としての J. J. (807)。
2. 想像力に関して「第一の対話」の「理想の国の住人」への同定 (819)。
3. 気質に関して「虚構の存在」の設定と J. J. の同定 (820—5)。
4. 「自然人」との同一化 (864—5)。

この順序は、Rの J. J. 像が一步一步その虚構化の階梯をのぼりつめていくさまをよく示している。最後にたどりついた結論：「私は彼の著作の中に自然人を見出したように、彼の中にその著作の人を見出したので、わざわざ彼がその著者であるというのが真実かどうか探る必要はなかったのです」(866)。『対話』の構成によって、Rはこの「直接的確信」にとどまらざるをえないことが定められている。それは「第一の対話」でFがもち出した、J. J. ひとりに対しては沈黙を守るという、同盟の「神聖な約束」が『対

話』の虚構において果たしている機能によるものなのである。「〔あの約束〕があるかぎり……彼が知らず、彼に打明けることも許されていない告発に対して答えを要求するのは不当だし、筋が通りませんからね」(874)。『対話』のはじまる前のあの不可知の領域に源を発し、被告を直接訊問することを不可能にした先験的な仮構がここでRに抱束としてはたらき、RはJ. J. に会っても直接彼に罪条告発を明きらかにして反論を引き出しえない。それはまさしく『告白』で述べられていたような、自分で自分に問うても答えが見出せないという闇の中のルソーの状況が、虚構化された表象のなかに円環を描くように回帰してきた設定にはかならない。それゆえにRはJ. J. 像をめぐる分離と同定の手続きを余儀なくされたのであり、その果てにRがさし出すものは、自分にとってのJ. J. と、FにとってのJ. J. との和解しがたい分離・対立でしかない。Rは「私のJ. J. があなたがたの指導者たちのJ. J. とどうしたら一致できるのか示してくださるか、それともこんなに違う二つの存在が決して同じ人間ではなかったということを認めなさい」(875)とFにせまる。それは「第一の対話」における分離1の新しい次元(「著者」は「私のJ. J.」に統合されている)での再提示である。

J. J. の作品を読んでいなかったFは、もっぱら「指導者たち」の与えてくれる情報によってJ. J. 像を描いてきた。Rの報告はそれとは全く対極にあって均衡するもう一つの像を提示し、それがあまりに fictif であることによって、Fは逆に自分のJ. J. 像もまた fiction ではなかったかという動揺におとし入れられる。「きっと両者のどちらかに間違いか嘘がある」(875)と言いつつ、彼は現実主義者としてふるまい、一種の修正案によってこの振幅を縮めようとする。真実は「中正な観察」によって発見されるが、指導者たちに憎悪の偏見があると非難するRの方にも、J. J. に対する愛情 (penchant) があるので中正さは疑わしい。一方「みんながみんな陰謀の仲間ではなく」「J. J. を憎みもせず愛もしない」立派な人々がおり、しかも「多くの点でこの公正な人々 (personnes équitables) は彼に関して公衆の考えることと一致している」(876)。「理性は公衆全員の賛同よりあなたのただ一票に力を与えるでしょうか」(878)。これは単なる多数決原理の再論ではなく、Fの立場をもっともよくあらわすものである。それは陪審員の公正さ (impartialité, équité) ともいうべき相対性の立場であり、同時に18世紀の人間学の主流である sociabilité の立場である。「彼の心が人間との交際には閉ざされているなら、人間にとってあなたのおっしゃる彼の想像上の

人物との交際が何になるでしょう」(877)。

Rはこの反論が強力であり、それだけ危険なものであることを認める。「その反論は……私の悟性が道に迷う暗黒の奈落に見えることを正直に申し上げます」(878)。そしてR自身は「この男の判断にあたって信仰問題で自分の信念を判断する場合と同じような態度」すなわち「解決できない反論に立止まることなく直接的な確信に身をゆだねる」(879)という、パスカル的な立場に身を置いた上で、この戦略的布石ののちただちに一つの戦術をとる。「困難を解決するのではなく、もし可能なら何らかの説明をするため」という最大限の譲歩の上で、「第二の対話」の終り(914)まで延々と続く論議を展開するのだ。その論点は二つある。第一は憎悪の伝染性、意志の共同化の傾向(880—93)である。それは「あなたの国の人々(フランス人)の共通の病」、「自尊心に蝕まれた心には自然なこと」で、「自然状態にあるきわめて公正なあなたの心を惑わした外的な原因」なのである。この批判は次のような時代の診断(逆告発)にまで行きつく。「現代は性格的に特別の憎悪と悪意の世紀です」「現代哲学の傲慢な専制主義は自尊心による利己主義を極端にまで押し進めました」(890)。第二はこの伝染性を逆にさかのぼる陰謀のヒエラルキーともいうべきもので、「この策謀が何にもとづくものかを知っているものはおそらく十人といない……。最初の陰謀は二人の人間〔ディドロとグリム〕の間に企てられた」(894)と言う。(時代の告発と起源への遡行の二つの方法が『学問芸術論』『不平等起源論』いらいのルソーのもっとも基本的なモチーフであることは言うまでもない。)そしてFの言う「公正な人々」も知らず知らずこの時代の意志のイデオロギー的伝染をうけており、これらの「正しいが弱い人々は……群衆から身を引き、片隈にとどまり……語るべき時がくるまであなたがたの指導者のしたいままにさせている」(895)。ここでRはまたもFによって公衆に一元化されていた中間的な人々を分離し「私の考えでは彼らはまったく違う考えをしているに違いない」(896)と言う。こうして分離された「公正な人々」に対するRの態度は両義性を含んでいる。彼はJ. J. の真実が知られるためにこの人々に期待をかけざるをえない。しかしだからといって彼らに対する告発が止むわけではないのだ。「あなたがた何と言おうと彼らは陰謀の仲間です。私が陰謀と呼ぶのは、ただあなたがたの指導者の秘密に加わっていることだけではなく、……彼らの不正な原理を採用していることもなのです」(900)。こうしてRはFの出した修正案を真向から粉碎する。そこにはもはや論理による説得を

こえて、自己の存在と原理を時代のイデオロギーの総体に対立させるルソーのラディカリズムを見ることができよう。

こうして「第二の対話」の終わるところでRは＜対話＞の表面から J. J. の方へと回帰していく。

この解明(光)は……私の眼にも不明瞭さ(闇)を一掃できるわけではありません。私はやはり自分の気持ちにとどまるといふ以外にもうあなたにお答えできることはまったく残っていません……。それは私と、判断される人物との間に媒介となるものがずっと少なくなったのがわかるからです (914)。

ここで『対話』におけるRの役割をふりかえってみると、それが二つの側面からなることが明きらかである。一つはFの提出する J. J. 像を論理によって分離するはたらきである。しかしこの分離そのものは、論理の面で最終的な統一をもたらすことができない。つまりFを説得する手段と考えた場合には対話はその本質的な無効性を明きらかにするのである。もともとRは「第一の対話」の冒頭のセリフからもわかるように、J. J. とドラスチックに分離された者として舞台に登場した存在である。それゆえ彼はこの舞台の上では分離と同定の論理を操る者として機能するのだが、彼自身の真の目的は、その論理によって対者を説得することよりも、J. J. との自己統一をはたすことのほうにあるといえる。それが可能になるのが、Rの第二の側面である虚構化のはたらきが生み出す場においてなのだ。Rの描き出す J. J. がたえずみずから虚構を産出する存在であるように、R自身がそのような J. J. の、そして「理想の国」の、虚構を紡ぎ出す人物である。RはFにその「理想の国」を語る前に何気ない前置きをつけている。「私があなたにお話しすることは、そんなことを話して聞かせる必要のない人にだけ理解できることなのです」(668)。つまり彼は作品の冒頭からすでに対話的コミュニケーションの論理とは別な、むしろその否定によって力をもつ一つの方法を提示しているのだ。虚構の力——それこそが parole による説得をこえる、コミュニケーションを生み出しうるのである。

ではFはどのようにしてこのコミュニケーションに参入するのか。それはRの話を聞くことによってではなく、J. J. の作品を「注意深く読み直すこと」によってである。「第三の対話」では、Fが「公正な人々」の中から自立的に真実を見出す者として歩み出る。ここで、『対話』のドラマの転換、登場

人物の確信への歩みが、「対話」の舞台の進行につれてではなく、幕間にのみ起こっていることに注意しておこう。第一と第二の対話の幕間でRはJ. J. に会い、自己の「直接的確信」にいたる。そしてFは第二と第三の対話の幕間に田舎に滞在して作品を読む過程で彼の確信に達したのである。

第三の対話 ここではもはやFとRの間での弁証的展開は後退し、Fがみずからの確信にいたる段階が語られる。これはまた、ルソーの読者論、読書論とみなすことができる。

1. 「第一の対話」によって「指導者たちの、罪人を中傷すると同時に罰せずにおこうという奇妙な熱意」が最初の安心をゆるがしはじめた(929)が、彼らに与えられた証拠から、J. J. が「嫌悪すべき偽善者や怪物でないなどとは一瞬も疑わなかった」(928)。

次に、一回目の「脈絡のない大急ぎの」の読書において、J. J. が文学者・医者・王侯・貴族・金持・女性・イギリス人・君主制を批判した箇所を抜き出し、「仰々しく彼の主人や保護者と思っているあらゆる人のうち、その矢のどれかで急所をつかれなかった人は一人もない」(927)ことから、指導者たちの迫害の動機が理解される。

それによって、指導者たちへの信頼が消え、「ひとりの悪人がほかの悪人たちの餌食になっている」(929)という結論が導き出される。ここでFはRが「第一の対話」で提案した分離案を受け入れる。J. J. に対する「恐ろしい印象」を balancer するようないかなる好意もFには生じない(931)。

2. Fは読書の方法について重要な反省を行う。「これらの書物の真の目的を判断するために、切り離されたばらばらの章句をあちこちあらしめることに専念せず、この読書の間にも読後にも自分自身に尋ねてみて、……それを書いているときの作者の魂と彼が生み出そうとした効果を見抜くことが最もよい方法だと考えて、読書が私をどんな気持ちにするか、どんな気持ちを残すかを調べました」(930)。

ルソーの思想についてよくその＜矛盾＞が論じられる。しかしルソー自身が『エミール』の註の中で一つの解答を与えていた。「長い著作においては同じことばについても同じ意味を与えることは不可能だ。どんな豊富な国語でも、私たちの観念のもちうる変化と同じだけの用語、言いまわし、文章を供給することはできない。……私は観念において矛盾しているとは思わないが、しばしば表現において矛盾していることを認めないわけにはいかない」

と (P. IV, 345)。ルソーがそうした自分の著作の読み方を、一個の理想的な読者を設定して述べたのが、このFのことばだと言ってよい。Fはこのようにして J. J. の著作に「真実ではないかも知れないがどんな矛盾も呈しない一貫した体系」を感じとる。だが、今はむしろ『対話』の固有の問題にもどって、ここでは日常的実在としての J. J. がいわば〈カッコに入れ〉られて、「書いているときの作者の魂」が「効果」の作用を通して読む私の気持 (dispositions d'âme) と交流するという点に注意しておきたい。それはわれわれが本稿の最初にのべた作品空間における作者と読者の関係に照応するものである。だからFはつけ加えて言う。「この読書で作者には心から尊敬を抱くようになりましたが、その人となりに対しては以前と同じ立場にとどまっていた」(930-1)。

Fは J. J. についてどういう態度をとるべきかを知るため、Rの観察談に期待する。しかしその時点ですでに、第一回目の読書によって指導者たちの悪意を確信し、「彼らを尊敬できないなら……いたるところに悪人だけを見出さねばならないのか」という不安にとらわれ、「しだいに自分の中に J. J. は悪人ではないという望みが芽を出すのを感じて」いる。これは「一人の悪人がほかの悪人たちの餌食となっている」という論理的判断と共存しながら、これを否定する心情的基礎が、J. J. の作品の魂にふれることから直接に培われているためにほかならない。

そしてFによる同一性の確信が、一回目の読書とRの会見談の J. J. 像との比較からもたらされる。「この二つの対象の一方を他方で明きらかにすることができ、すべてが一致しており、確かに同じ個人に属するものだと確信できるようになりました」(932)。

3. しかしこの J. J. =作者という同定はFにとっても最終段階ではない。この問題が解決したのち、Fは J. J. に対する態度を決めねばならない。すなわち「告発者を裁いたのちに、私自身の手で被告を裁かねばならない」(932)のである。彼はそれをRのように J. J. に会いに行くのではなく、「これまでよりももっと順序だてて注意深く作品を読み直すこと」によって果たそうとする。そして彼はその作品に「自分の魂にしみ込んでくる彼の魂からあふれる感情」を見出し、彼の読みとった J. J. の著作の基本原理を要約してみせる。Fがこの二度目の読書の結果える確信は正確にRが J. J. との会見によって得た確信と対応するのである。

「第三の対話」のこれ以後の展開は簡単にまとめるだけにしておこう。Rは以上のようなFの確信に対して、Fがやはり自分の眼で J. J. を調べず、著作とRの証言によって判断しているだけだから、自分よりも被告の無実の確信 (certitude) の度合いが低いという (947)。ただし、自分の確信は *intérieurement persuadé* であって *régulièrement convaincu* ではないという不安があるのに対し、Fの方はみずから身を置いていた迫害の陰謀についての知識が代償の役割を果たしていて、両者の危惧の念を同じ程度のものに行っているのだから、正しい真実に達するためにぜひとも J. J. に会うことをFにすすめる。ここには自分の著作を後世に伝える「忠実な受託者」(951)を求めるルソーの願望が直接に反映されている。だが一方で J. J. は(そしてルソーは)敵たちが「もう足を踏み込めないような避難所」(952)へ避難してしまっているのである。「第三の対話」後半に表明されるルソーの痛々しい希望と絶望の交錯は、もはや作品空間の境界をあいまいにしつつ伝記の領域へと越境していく。われわれはその領域でこの作品がたどった象徴的な事件と作者の挫折の経緯を「この著作に関するその後の物語」と題された後書きによって知ることができる。ルソーは作品の原稿が新国王ルイ十六世の目にふれ、その権威によって一挙に真実が回復される奇跡を願って、それをノートルダム寺院に捧げようとするが、内陣の通路にある柵の扉が閉ざされているという偶然によって果たせない。その後につぎつぎとルソーの試みを覆えす失敗のすえ、彼はついに後世をも含めてこの地上での復権の望みを絶ちきるにいたる。このような後書きを含む作品『対話』とは、一つの挫折に帰した作品というよりもむしろ、挫折をその空間に抱え込んだ作品というべきだろう。『告白』という作品の末尾につけ加えられた、『告白』の朗読会と聴衆の沈黙の回答のエピソードが『対話』への道にルソーを追い込んだように、『対話』の後書きとして作品の中に書き込まれた挫折と、作者自身の公衆への沈黙の回答が、彼を『夢想』のモノローグ圏へと追いつめ、あるいは解放するのである。

5

＜ルソー＞が＜フランス人＞の J. J. 観に対置した＜真の J. J. 像＞は、それ自体がルソーという存在の真価を伝えるものなのだろうか。むしろこの像が作者の自己分析に基くものだということも、それがきわめて誠実な作業であることも疑えない。しかし、作品が＜対話＞という形式上の仮構と、自

己の二重化という仮構との複合のうえに組みたてられたとき、＜ルソー＞が描き語る J.J. の＜像＞は、このような虚構という磁場の牽引をうける。『対話』における＜自己分析＞はたえず虚構化への踏み出しをとめない、そのずれの効果の中でこそ完全に果たされるのである。虚構による真実——文学作品についてよく言われることばだ。だがこの企てがルソーの内的真実をそのまま保証するものと期待するのは誤っている。＜ルソー＞は彼の J.J. 像を相手に語り聞かせたあと、次のような重大な留保をつけるのである。「私の会った男の主要な特徴をあなたに述べましたが、それ自体では善でも悪でもないために時間がたっても偽善によって左右されないものに……叙述を限りました。たとえ真実であっても本当らしくないことや、神と私だけしか知らないが、できれば人々に知られるに値すること……は私が話すとき期待しないで下さい」(874)。こうして parole による叙述では、真実は vraisemblance の必要によって限定される。したがって『対話』は、虚構化された対象としての J.J. 像の中に最終的な真実のあかしを賭けているのではないことになる。ではルソーの真価はどこに、どのような仕方で見出さるのだろうか。

「作者は原理から原理へと遡り、後期の著作になって第一原理へと達しているように思われました。だから総合しようとすれば、そうした著作（最後に出版した『エミール』）から始めねばなりません」(933)。

「第三の対話」で＜フランス人＞が実践する J. J. の著作の遡行的な読み直し (re-lecture) とは何であろうか。読者に自分の作品を読み直す方法をすすめているだけなのだろうか。むしろルソー自身が『対話』という作品において、fiction を通じてルソーという作品の「読み直し」を試みたのではないか。それこそが『対話』が『告白』から継続し、極限化したモチーフではないだろうか。＜フランス人＞は J. J. の著作について、この「自然の画家にして弁護人は、自分の心の中からでなくてどこからそのモデルを引き出しえたのでしょうか」(936) と自問する。自己をモデルにした自然……。では『対話』におけるルソー像は一体なにをモデルにしているのか。MacCannell が言うように、そのモデルは虚構を生み出す言語そのもののうちにしか存在しない。『対話』という複雑な écriture の装置の中のルソーは、『対話』の言語そのものの中からでなくてどこからそのモデルを引き出しえようか……。

ミシェル・フーコーは『告白』の言語を「直線的言語」とよび、それに対して『対話』の言語は「垂直の *écriture*」の上に構築されると言う。前者が朗読会での *parole* となって、聞き手の沈黙の中に封殺されたとき、この『対話』の言語は、「分離されて自分自身の上に重ね合わされ、決して完結することない一種の加算によってしか自己をあらわしえない一つの主体」によって語られる¹³。たしかにわれわれは〈ルソー〉によって語られる J. J. が、作品の奥に向かって彼自身の〈対話〉を書いている後ろ姿をみてきた。「一日に十五分以上もあてることのまれな」「途切れたり中断されたりする書き方」(837) が、「対話」という形式ともっとも鋭い矛盾をなしている。ブランショが端的に指摘したように、「大作家のほとんど誰しものが楽々と、恵まれた熟練のわざ (*maîtrise*) をもって書いていたこの世紀にあって、ルソーははじめて嫌悪と後ろめたさと罪責感をもって書いた人である」¹⁴。それゆえ、『対話』こそ、そうしたパラドックスをもっとも極限的なかたちであらわすものと言えるだろう。

文学者・思想家としてのルソーの活動の意味を、*parole* から *écriture* への移行という基本的な観点から照明をあてることが可能である。『不平等起源論』や『言語起源論』において、言語は「最初の社会」の形成とともに出現したとのべられている。この時期は人類の黄金時代であり、*parole* は自己の直接的現前という幸福を享受する。(ルソーはつねに「雄弁」に重要性を与えていた。) しかし「社会状態」の進展とともに、この *parole* は墮落し、社交性 (*sociabilité*) のもとで悪の刻印をおびる。人は他人をあざむき、虚栄心を満たすためにしゃべる。自然状態から社会状態への移行はルソーの理論において不可逆的な、回帰不能なものである。だがそれとともに、学問と芸術を社会の墮落の産物と批判したとき、彼はそれが治療しえない病気に対する「緩和剤」(*palliatifs*) になりうるという、唯一の可能な方法を提示していた(『ポーランド王への回答』 P. III, 56)。『対話』においては、J. J. はつねに「現存する制度の保存を主張」したとされる。それは「制度の破壊(革命)が、悪徳を残したまま一時的な緩和剤を奪うだけだから」(935) である。この唯一の可能な方策は、緩和剤という変わらぬ比喻とともにルソーの全思想にさまざまな変奏をなして反覆される重要な主題であり、自然状態から社会状態への移行・墮落という彼の大原理とつねに相補的な比重を与えられねばならない。ルソーが「書くこと」に与えたパラドキシカルな意味もまたそこにある。失われた幸福な *parole*、社会にあって墮落した *parole* に

対し、「書くこと」はそれ自体いわば悪（不幸）の加重にほかならないが、
そのことによってまた毒を制する毒という「緩和剤」となりうるのだ。

そして parole から écriture の移行もまた不可逆的なものである。だが
「書くこと」は「話すこと」の単なる代理ではない。この移行の運動が、ま
さに逆方向への、parole への回帰の希求そのものを原動力としている点が
本質的なのだ。かくして「社会契約」はある意味では、墮落した社会状態に
おける人間的依存（支配—被支配）の中で失われた原初の parole を回復す
るというモチーフに動かされた「法」の écriture の要請であり、『エミール』
はこの社会の悪からいかに離れていようと、しかるべき年令に達したら
社会的関係に入らざるをえない一人の子供の肉体と精神に刻まれる徹底した
人工（自然を模した）の書き込みである。

『告白』から『対話』をへて『夢想』にいたる自伝的三部作は、parole
を希求しつつける écriture が極限化し、純化していく方向を示しているが、
それぞれの作品がその内部にこの移行を二重の位相として内包している。ル
ソーは社交界で新しい友人や保護者をえようとするとき、つねに彼自身のそ
れまでの身の上ばなし（mon histoire）を贈り物として相手に差し出してきた。
『告白』はこの身の上ばなしが écriture に転化した作品だと言える。そ
れは最後に再び朗読会で parole たらんことを希求して聴衆に差し出され
る。そこでの受け手の沈黙という挫折の上に書かれた『対話』は、まさに送
り手と受け手の相互的な parole への希求を内包した écriture にほかならな
い。そしてこの作品をノートルダム寺院へ寄託するという象徴的な身ぶりによ
って、この世での最後の、至上の受け手（国王）への parole に転じよう
とする試みが挫折したのち、『夢想』のモノローグが始まる。ここではも
はや parole と écriture は見分けがたいものとなる。なぜなら、現在の書く
という行為自体が、未来の自己への語りかけなのだから……。

この最後の作品を除けば、ルソーはつねに「書くこと」によって読者を
〈獲得する〉ことをめざしてきたのである。彼が社交界での不適応から「書
くこと」を選んだ事情を語る有名なテキストがある。

もし私が、人前ではきまって自分の不利なように見られるばかりか、自分と
は全くちがったふうに見られるのでなければ、他人と同じように社交好きであ
ろう。私が選んだ書くことと身を隠すという立場はまさに私にふさわしいもの
だった。私が姿を現わしていたら、決して自分の真価は知られなかつた

う。(『告白』 P. I, 116)

彼の「真価」は人格的な現前、つまり対他性を排除しているのである。それは上に述べたような、parole から écriture への限りない移行運動の中にしか見出せないのだ。(この運動が停止する『夢想』の地点では、もはや自分自身以外の読者に「真価」をあらわすことは問題ではなくなるだろう。) ルソーが要請する読者の行為とは、人前から姿を隠した自分に会いにくることではなく、écriture が生み出されていく過程を辿りなおすこと(re-lecture)なのである。つまりこの過程の含んでいる逆過程をたぐりよせ、次々と parole の起源へ、「自然状態」へと辿りつめることと言ってもよい。『対話』という装置が可能にするはずの目的は、こうして尋ねあてられたルソーの思想の原像としての自然状態に住んでいる自然人 J. J. ルソーの姿を描き出すことである。そこでは自己の虚構化が、他者との関係(社交界)において「自分とは全くちがったふうに見られる」(m'y montrer tout autre que je ne suis) ことの不安からルソーを解放すると同時に、彼が終生抱きつづけた「別人になる」(devenir autre) というロマネスクな願望をも実現してくれる。さらに次のように言うこともできよう。「身を隠し」書かれた作品の総体として提示されるルソー、それこそが彼の「真価」なのだ、と。この点において『対話』という作品の成功と失敗はけっして二者択一的ではありえず、むしろ成功を通して失敗が、失敗を通して成功があるといった両義性によってのみ語りうるだろう。だが翻ってみれば、それは『対話』のみの問題だろうか。われわれが書かれたものを通して一人の作家や思想家を知るといふ事情のなかにこの問題の根拠と必然があると言わねばならない。「肖像画」や伝記の「もっともらしい誘惑」を厳しくしりぞけたのがルソーである。そして『対話』は、いわば強すぎるコントラストをもって、その真実を明らかにしているといえようか。

註

- (1) カッシーラー『ジャン＝ジャック・ルソー問題』(生松敬三訳) みすず書房、62-63頁。英訳版(Translated by Peter Gay, Indiana Univ. Pr. Pbk. p. 92)によって、訳文を修正した。カッシーラーはここで精神分析用語を用いつつ、ルソーの個体の病理ではなく、彼に対する時代の無意識の方に鋒先を転じていることに注意。

- (2) ROUSSEAU JUGE DE JEAN JACQUES, *Dialogues* in *Oeuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Tome I. 以下、本文では『対話』と略称し、引用文にはプレイヤード版全集の頁数のみをカッコ内に付記する。『告白』についても同じ。その他の作品からの引用は、同全集により、P. IV, 123 (Pléiade, Tome IV, p. 123) のように略記する。

- (3) 近年アメリカであいついで二人の女性研究者による学位論文が出ている。

Suzanne Marguerite JAMIESON, *L'Etre et le Paraître, une étude des DIALOGUES, ROUSSEAU JUGE DE JEAN-JACQUES*. The Univ. of Texas at Austin, Ph. D., 1970. (71-142)

Juliet Flower MACCANELL, *The Autobiography of the Fictional Self, Reflections on the Problem of Fiction in ROUSSEAU JUGE DE JEAN-JACQUES*. Cornell Univ., Ph. D., 1971. (72-8963)

(末尾のカッコ内の数字は University Microfilms 社の Dissertation Copies Order No.) なお本稿執筆の時点では前者の方は未見である。

- (4) *Génie et folie de Jean-Jacques Rousseau*, J. Corti, 1966, p. 192.

- (5) 解釈妄想病は、ほぼクレッチマーの分類による「パラノイア」に相当し、Sérieux と Capgras によって集大成された (*Les folies raisonnantes, le délire d'interprétation*, 1909.). 小木貞孝「フランスの妄想研究」(『精神医学』第2巻 1960年, 589-591頁)に彼らの説の要約紹介がある。『対話』や書簡にみられるルソーの妄想の<症例>は、古典性と一般性の水準において見事にこの疾病単位に一致している。だが、一般に精神医学の疾病単位そのものが多くの症例から帰納的に導き出され命名されるものであり、Sérieux と Capgras の場合もルソーはそうした個体の症例の一つとして、一世紀以上も前の時代のコンテクストを捨象して抽出されている。したがってこの病名でルソーを逆に規定することによって彼の全体像に何らかの意味づけを行うためには、精神医学の現在の準位と本質的な問題をふまえた上で、いくつかの慎重な手続きを介さねばならないであろう。

- (6) 『対話』において、直接的な他者への語りかけである書簡と似た位置をしめるのは、作者が付した数々の註であり、妄想観念の表出は意志的な仮構の緊張を伴わないだけに、よりストレートである。これは他者としての読者に向かって作品を説明する parole にほかならない。それゆえ、そこにはルソーの疑惑と不信の対象となる個人名が次々と挙げられている。名指しの非難は書簡と註が共通してもっている性格で、とくに 1970. 2. 26. サン・ジェルマンあての手紙はこのような

特徴と陰惨な色調において、『対話』の註を集成したような性格を示す（但し、註の方が年代は後で、個々の材料はより新しい）。それに対して『対話』の本文中では個有名詞は意識的に限定されており、いわば過去の交友と「時代の意志」を象徴するような数人しか出てこない。

- (7) ヒューム：「この事件のすべては悪意と狂気が手を携えたものです。……私はこんな邪悪で危険な男とかかわりをもったことを心から後悔しています」（ダヴンポートあて，1766. 7. 8.）「他の多くの点からも彼は悪魔のような嘘つきだと思ひます。……あえてあなたに御忠告申し上げることがあるとすれば、あなたが手を染められた寛大なお仕事（ルソーの庇護）を、彼が手抜きなくベッドラム（精神病院）に閉じこめられるか、あなたと喧嘩してあなたから逃げ出すまで、お続けなさいということです」（ダヴンポートあて，1766. 7. 15.）
- (8) 隣人—公正な第三者という移行と同位性については、精神分析医の臨床的立場がそれを象徴している。
- (9) cf. Michel Foucault の『対話』序文（Bibliothèque de Cluny, 1962）p. VIII.
- (10) 虚構化については MacCannell の研究に示唆をえた点が多い。（註2 参照）
- (11) 「感受性はあらゆる行為の第一原因」であり、要約すれば次の表となる（805—806）。

肉体的，有機的 受動的・感受性	快樂と苦痛に導かれた自己保存と種の保存（自己愛）					自然
精神的・能動的	ポジティブ 肯定的	引力	自己の存在感の 拡大と強化	自然の単純 な働き	自己愛の拡大 （憐れみ）	自然的
（対他的）感受性	ネガティブ 否定的	斥力	他者の存在感の 圧迫と縮少	反省，比較に よる複合物	自尊心への 退化	社会的

- (12) *Op. cit.*, p. 37—39. （註3 参照）
- (13) *Op. cit.*, XI—XII. （註9 参照）
- (14) M. Blanchot, *Rousseau et la littérature*, 《N. R. F.》, juin, 1958, p. 1058.
- (15) 拙論「J. J. ルソーの思想観」（『人文研究』1975 第27巻第6分冊）参照。
- (16) ここにヘーゲル的な即自—対自，疎外とその克服という弁証法との類似とともに、根本的な相違（ヘーゲルの進行をルソーがあくまで悪＝不幸に対する緩和剤と考えた点）を見ることができる。なお、「緩和剤」の比喩が、青年時代 Warens 夫人の助手として学んだ毒草—薬草の知識からきていることは言うまでもない。